

18年7月25日

第22号

素流協 News

平成18年7月25日発行・発行所 岩手県素材流通協同組合 盛岡市菜園1丁目3-6 電話 019 (652) 7227 / FAX 019 (654) 8533

平成18年度第一回県産材

利用拡大推進需給協議会開催

素材生産事業の活性化および県産材の利用拡大を図るため、消費者である合板工場と合板工業組合、供給者である素流協組合員を代表

する素材生産者とその団体、そして行政としての県および事務局としての素流協を加えて、平成十六年度より構成・設置された県産材利用拡大推進需給協議会は、設置三年目となる今年も平成十八年度第一回需給協議会を七月三日午後一時半から盛岡市菜園の農林会館会議室で開催いたしました。

開会に当り、下山裕司協議会長（県素材流通協同組合理事長）は「本年度第一回目の県産材利用拡大推進需給協議会だが、本年度も三ヶ月に一回、この協議会を開催する予定であり、宜しく願いたい。最近、価格はともかくとしても、国産材丸太が動いており、需要動向が変わってきた。率直に言っ

ては良い事だと考えている。先般、国産材が動き出し、林業生産が活発化することは、日本の林業にとつ

ては良い事だ」と考えている。先般、林野庁が行う各県の林業構造改善事業担当職員の研修で、岩手県素流協の生い立ちや事業の内容、将来動向等について話してきた。林野庁では、これから伐期に達してどんどん出てくる人工林材をどう使っていくかといえ、その多くが並材であり、用途としては合板や集成材などのエンジニアード・ウッドが主流になると考えている

ようだ。そうなれば、供給する相手が合板工場にしる集成材工場にしる相当大きな規模であり、いかに効率的、計画的に需要者に対して的確に納材していくかが課題になる。いずれ国産材時代というかけ声を実際の動きとして出てきている。岩手県素流協も注目されており、その注目に恥じないよう頑

張って参りたい」とあいさつしました。

続いて協議に入り、各委員からの報告の概要は以下のとおり。

○ 岩手県素流協の平成十八年度の事業計画について↓共同販売の事業では、組合員の扱う素材の共同販売が十一万^m、国有林等から購入する素材の販売が二万四千三百^m。合計十三万四千三百^mの販売を計画している。

○ 合板用素材の供給量の実績推移と将来見通し↓五月から六月はじめにかけて宮古、大船渡とも在庫は少なめであったが、その後の入荷は旺盛に推移。四、五月の出荷状況を見ると、昨年度に比べアカマツの出荷がかなり増加している。全体量で見ると、四、六月累計は前年の二〇、七六四^mに対し、今年は三三、七〇一^mで前年度比一六二%である。十八年度の国有林からのシステム販売はホクヨープライウッド向けが四森林管理署・支署から九、〇〇〇^m、北日本プライウツ

ド向けが三森林管理署・支署から六、三〇〇m、あわせて七つの森林管理署・支署から一五、三〇〇mの出荷を東北森林管理局と協定に基づき、計画している。

○ 合板用原木の輸入の現状と今後の見通し↓輸入原木と比べても地域差があるが、南用材はFOB（本船渡し価格）で三〜五ドルの範囲で上昇している。PNG（パプアニューギニア）は横ばい。北洋材については、カラマツは横ばいだが、エゾマツ、アカマツはCIF（運賃・保険料込み価格）で二ドル上昇して

いる。北洋材は年間二五八万二千m日本に入っているが、おそらく中国には日本の四〜五倍入っていると思われる。将来見通しは、いろいろな条件が重なってくると思われるが、価格面ではほぼピークに達しているものと思われる。伐採規制がどこまで徹底されるかが大きく影響すると思われる。

○ 合板製品の需給動向について ↓昨年一年間で、合板用の国産材の消費量が八六万二千mで、前年比一五八%という数字になった。これはネダノンの売れ行き

に左右されるのだが、木造住宅における床材がかなりネダノンに変わってきた。ネダノンの普及拡大のため、岩手県で新流通のソフト事業として、国産材合板を壁材に使用するための条件としての壁倍率五倍を具備するための実験が終わり、現在国土交通省の認可待ちとなっている。

○ 合法性証明の取り組みについて ↓新しい素流協の送り状に「上記の原木は、持続可能な森林経営が営まれている森林から合法的に伐採されたものです」と明記した。国有林材の場合は、シ

ヒロシの独白

「今後、国産丸太の需給構造はどう変化するのか」



ステム販売の契約書と素流協の送り状がセットになることよって、合法性の証明は出来る事になる。一方、組合員の出荷する原木に関しては、素流協が認定団体となり、審査委員会を設けて随時組合員を認定して認定番号を出す事になる。組合員はこの認定番号を送り状に記入して合板工場に納入する事によって、その原木の合法性を素流協が証明する事になる。ただしこの場合、その原木の伐採届の写しを素流協に提出する事が必要条件である。

のゆえに次々と伐期に到達する人工林を二十年以上にわたって毎年大量に伐採していかなければならないことを意味するのである。先に述べたように、人工林面積

わが国の森林面積二、五〇〇万haのうち、人工林面積が一、〇〇〇万haを超えて全森林面積の四〇%を占めるようになった。現在、この人工林のうち間伐を必要とする面

積（五齢級〜八齢級）が五〇%以上も存在するというわが国森林の齢級構成のアンバランスさに起因する問題として、早急かつ大量な間伐作業を主とする森林整備事業

の実行が強く求められている。さらに、これらの人工林は、今後まもなく続々と伐期を迎えるという実態にある。そしてこのことは、人工林のアンバランスな齢級構成

の半分以上を占める要間伐林分を適正に整備していくことが強く求められていることに対処するため、国としても「緊急間伐対策事業」などの間伐促進施策を重点的に推

進しているところである。ところがそこで問題になるのが、間伐作業を実施すると必然的に大量の丸太が産出されることになるがその間伐材が半分以上も利用されずに林地に放置されているという実態である。われわれはこの現実について強い関心を払うと同時に間伐木の有効活用を含めた何らかの対応策を講じなければならぬということである。この適正な間伐木処理に関する問題は、我われにとつて地球環境問題や資源の有効活用の観点からもきわめて重要な課題である。すなわち、わが国の森林資源の現状を人工林に焦点を当てて考えると、間伐材の大量な発生量および今後一定期間の間に集中する人工林から出てくる大きな塊としての年間主伐量をどのよう

に活用していくのか。間伐作業という森林整備の過程から産出される丸太は小径材・短尺材の比率が高くなることは避けられず、また今後伐期到来の人工林から生産される丸太も並材が主体となって品質の高い丸太の比率は小さくなる

と考えられる。もつとも従来から高品質材として評価されてきた、いわゆる無節の柱材とか通直で年輪のつまった大径材といった素材が今後もこれまで通りの評価がなされるかは疑問な面もあるのではあるが、いずれにしても今後の国産丸太の需要構造が変化するとすれば、人工林における間伐や主伐から生産される大量の並材・小径材・短尺材の存在が大きな変動要因になるであろう。一方、最近になってこれまで連年下がり続けてきたわが国の木材自給率が下げ止まると同時に上昇傾向を示し始めたようである。このことは、わが国における国産丸太の需給構造に変化が起っていることを物語っている

と私は考えるのである。事実、エンジニアード・ウッドといわれる合板や集成材の原材料として国産丸太を使用する量が急激に伸びており、この傾向は今後も当分続くと考えられるのである。これらのエンジニアード・ウッドの原料(丸太)は、必ずしも従来から言われているような高品質なものでなくてもよく、価格的に輸入材が可能であるならばわが国の人工林から産出される並材・小径材・短尺材で十分に適応できるようになってきたのである。このエンジニアード・ウッドの原材料として国産丸太の需要が急激に伸びている理由は幾つも考えられるが、たとえば、世界全体の森林資源の減少と世界的な環境問題としての森林の取り扱いに対する関心の高まり、不法伐採の取り締まり強化とその輸入禁止、木材輸出国からの原木輸出量の減少と木材の製品・半製品の輸出量の増加、とくにロシア材を対象とした隣国中国の旺盛な原木輸入圧力に伴うわが国へのロシア産丸太の減少傾向、一方、わが国の状況としては、大量に丸太を消費する合板工場や集成材工場の加工技術の向上による国産丸太を使用した製品化技術の確立、わが国の森林資源の充実によって

丸太の量的な供給能力が備わってきたこと等である。

これまで述べてきた状況から、私は現在、わが国の林業・木材産業が大きな転機を迎えようとしていると考えるのである。長い間低迷が続いたわが国林業が、いままさに訪れようとしている林業をめぐる環境変化の「上昇気流」に乗って林業再生ができるかがわかれわれ林業関係者に与えられた喫緊の課題である。私はあえて、最近のわが国林業をめぐる環境の変化を「上昇気流」と言ったが、正確に言えば「上昇気流にした」という願望をこめた言葉である。この願望を実現するためには、我々は「しなければならぬこと」がたくさんある。

次回に、国産丸太の需給構造の変化を「上昇気流」にするために「われわれがしなければならぬこと」について唯我独尊的に述べてみようと思う。

落穂拾い

△人間は齢を重ねると子供の頃とは時間感覚が異なってくるようである。というのは、筆者は先頃60歳代の半ばを過ぎたのであるが、近年は1年間がものすごく早く過ぎ去っていくという実感が強いのである。子供の頃にした1年間の長さとお境に差し掛かった今日この頃に感ずる1年間についての時間的感覚の違いは何に由来するの

か。この世には「新幹線の走行速度」や「松坂大輔投手の球は速い」といった時の単位当りの移動距離の速さのようこの宇宙における一定不変の客観的な時間の速さ(物理的な速度)とは異なった「感覚的な速さ」というものがあるようである。人間が感ずる「月の速さ」の場合にいう「時間」とは、人間の心の内の「意識的なもの」なのである。子供の頃には正月が待ち遠しくて、月日の遅々とした歩みに恨めし

く思ったことがあったが、最近の筆者にとつては、歳が重なっていく正月などを待ち遠しいなどと考えたこともないし、逆に1年間の過ぎ去る速さを恨めしく思うのである。一般的に、人間は楽しいときには時間が速く過ぎるよう感じるといわれている。例えば、御伽草にある「浦島太郎」の話では、主人公の浦島太郎が海底にある竜宮城で過ごした時間は実際には数十年経過していたのにほんの数日にしか感じら

れなかったのであるが、浦島太郎にとつては竜宮城の生活が余りに楽しくて時のたつのも忘れてしまったということである。一方、筆者にとつての最近の数年間を振り返ってみても「楽しくて時のたつのも忘れてしまった」という事柄が無かったように思うが、なぜ、最近の筆者にとつての1年間がこのように速く過ぎ去るのでしょうか。誰か、知っている方がありましたら教えてください。

平成18年6月分の販売実績

(組合員からの出荷分)

ホクヨープライウッド㈱、北日本プライウッド㈱の2社に出荷した組合員からの合板用丸太の6月の販売実績は下記の通りです。

入梅が遅れて天候に恵まれたためと、先月やや減少した反動もあったようで、ホクヨー7,337m³、北日本4,321m³となり2社合計で11,659m³と過去最高の出荷数量となりました第一四半期の合計が両工場合わせて30,474m³となり、前年比149%の実績です。一方、5月まで旺盛だったアカマツの出荷は、例年同様にやや減少に転じております。

項目 樹種	長級 m	径級 cm	販売先		計 m ³	累計 m ³	出荷割合	
			ホクヨープライウッド㈱	北日本プライウッド㈱			樹種毎 %	樹種毎 %
			m ³	m ³				
スギ	2.0	14上	1,842	2,089	3,931	10,613		57.7
	4.0	14上	1,485	1,541	3,026	7,774		42.3
	計		3,327	3,630	6,957	18,387	60.3	100.0
カラマツ	2.0	14上	2,831	405	3,235	7,018		99.1
	4.0	14上	0	12	12	67		0.9
	計		2,831	417	3,248	7,085	23.2	100.0
アカマツ	2.0	14上	1,039	241	1,280	4,403		88.0
	4.0	14上	140	34	174	599		12.0
	計		1,179	275	1,454	5,002	16.4	100.0
合計			7,337	4,321	11,659	30,475	100.0	100.0

平成18年6月分の販売実績

(国有林材システム販売からの出荷分)

ホクヨープライウッド㈱、北日本プライウッド㈱の2社に出荷したシステム販売による合板用丸太の6月の販売実績は下記の通りです。

岩手県の森林管理署・支署から、ホクヨーへは658m³、北日本へは451m³となり、合わせて1,109m³となりました。

項目 樹種	長級 m	径級 cm	販売先		計 m ³	累計 m ³	出荷割合 樹種毎 %
			ホクヨープライウッド㈱	北日本プライウッド㈱			
			m ³	m ³			
スギ	2.0	14上	557	433	990	2,447	75.8
カラマツ	2.0	14上	101	18	119	619	19.2
アカマツ	2.0	14上			0	162	5.0
合計			658	451	1,109	3,228	100.0